会議記録（要旨）

会議名		令和４年度　第２回杉並区子ども読書活動推進懇談会
日　時		令和４年１０月３１日（月）　午前１０時～１２時
場　所		中央図書館　地下ホール
出席者	委員	前田委員、スギヤマ委員、中山委員、渋川委員、小林委員、戸賀崎委員、辻委員、渕上委員
	事務局	原田中央図書館長、奈良学校図書館支援担当係長、辻事業係長、佐川企画運営係長、企画運営係（早川主査、芥川）、事業係（島谷）
配付資料		令和４年度　第２回杉並区子ども読書活動推進懇談会　次第 令和４年度　杉並区子ども読書活動推進進捗管理票 その他、委員からの持ち寄り資料

１．開会

２．中央図書館長　挨拶

３．令和４年度第一四半期「杉並区子ども読書活動推進計画」進捗状況報告について

事務局より、令和４年度第１四半期、第２四半期はトピックについて進捗状況を報告。「学校における読書活動の推移」の部分は、学校図書館支援係長より報告。

〈家庭・地域等における読書活動の推移〉

・今年度より「読み聞かせボランティアへの支援」の項目に、各館でボランティアが参加した事業を集約した。おはなし会への参加など、ボランティアも活動に戻ってきた。

・中高校生のための児童館である「ゆう杉並」では、今年度より中高校生の図書ボランティアが、おすすめの本を紹介したりポップを作る活動をしている。

〈学校における読書活動の推移〉

・児童・生徒に一人一台のタブレットが配布されてから、トップページに学校図書館の本の検索ができるアプリを表示させており、使い方の指導を行っている。

・学校図書館活用実践校（今年度は５校）には別に予算をつけ、デジタルデータベースや図書を購入し、学校図書館を活用する授業をしている。

・学校図書館のシステム上に掲示板を設置し、学校司書同士で情報交換ができるようになった。

・第２四半期に、井荻中学校ではＰＣルームと学校図書館の間の本棚を取り外し、一体化して広いスペースの学校図書館にした。また、天沼小学校で校舎の改築に伴い地下にあった学校図書館が、２階の従来の場所に戻った。

・特別な支援を必要とする子どもへの支援として、各校の学校図書館でクールダウンや図書館登校の児童・生徒を受け入れている。

〈図書館等における読書活動の推移〉

・今年度、コロナによる行動制限がなくなったため、消毒やマスク、１回あたりの人数制限などの感染対策を続けつつ、図書館の事業はほぼ通常通りに戻った。

・小学校１年生への図書館バック配布に伴う職員の学校訪問や児童の図書館訪問、また、調べ学習室の夏休み開放も、各館で例年どおり行われた。

・「図書館を使った調べる学習コンクール」は1447件の応募があり、審査が終了した。

〈読書活動における情報の発信〉

・「杉並区子ども読書月間での啓発活動の充実」の項目に、各館で読書月間に行った事業を集約した。標語応募は小中学生あわせて819件あり、先日審査が行われ優秀賞が発表された。

・社会教育関係施設等連絡作業部会にて、夏休み子どもカレンダーの作成、発行を行った。

〈来年度に向けだ事業について、中央図書館事業係長より報告〉

「出産を控えた家庭への支援」のプレパパ・プレママを対象とした事業を、子育て支援施設等で実施するため、図書館、関連部署である児童青少年課、子どもセンター、保健センターとで、今後の事業の実施について検討し、以下の共同事業を行うことにした。

①プレパパ・プレママ向けのブックリスト(パンフレット)作成

来年度、ブックリスト等の作成と配布を行うため、印刷代の予算計上をする。

②「妊娠中の親のためのおはなし会」(プレパパ・プレママ向け)

今年度中にテスト実施する。会場は子育てプラザ、情報提供は子どもセンター、読み聞かせは図書館という形で役割分担する。このテスト事業が成功すれば、来年度から継続的に実施したい。

【質疑応答】

委員　：プレパパ、プレママの事業は非常にすばらしい取組だと思う。図書館に行けば、聞こえても聞こえなくても、どんな子どもでも一緒に読み聞かせしたり楽しめるようになってほしいと願っている。葛飾区の図書館に行くとバリアフリー専門の図書館員がいてどんな対応でもしてくれる。そういうことが当たり前になってほしい。ブックスタートは点字と11か国語があるが、聞こえない子どもたちに向けてどう対応していくかを思案中だ。図書館はそこも含めて、みんなのためになる取組を、ぜひよろしくお願いしたい。

事務局：ブックスタートでは保護者の話す言語に合わせた資料を配布している。杉並区では保健センターの4か月検診でブックスタートの本を手渡ししている。検診が終わってわりとすぐ、図書館の赤ちゃんおはなし会に来てくれている。

中央図書館の赤ちゃんおはなし会は週2回で各回定員は7組、すぐ定員になり、多くの方に来てもらっている。本が読めなくても絵や色で絵本を楽しんでくれているのがわかる。ボランティアと、よりよいおはなし会を作っていきたい。

４．子ども読書活動の推進に向けて

委員　：各委員が関わっている子どもの読書活動について、杉並区の子ども読書活動推進に活かしていけるようお話をうかがう。今回は、家庭文庫の活動を続けている委員にお話していただく。家庭文庫活動はあまり知られておらず、あらためて本日、家庭文庫というものがどういうものか、どのような思いで営みをされているのかお聞きする。

〈委員の発表〉

・自分の家で文庫を始め、45年になる。利用する子どもは0歳児から小学生までが中心で、時々大学生が来ることもある。

・文庫を始めた時に思ってもいなかった状況は、子どもの居場所になっているということだ。先生も親もいない、誰にも評価されない場所が子どもにとって必要だと、今は確信を持っている。大人にとってもそういう居場所は必要だ。ただの居場所ではなく、そこに本があるということに意味がある。

・今までで一番の危機はコロナだった。文庫を閉める時期もあり、読み聞かせや行事もできなかったがなんとか続けてきた。利用者は大幅に減った。それでも来てくれる子どもはありがたい。

最近になって新しい利用者が増えてきている。

・読書力のない子どもでも手を伸ばせるような本を選んでいる。本に手を触れるところから読書が始まると思っている。子どもには本を薦めることもあるが、感想はあえて聞かないようにしている。子どもの方から話してきたら聞くようにしている。

・小さいころから文庫に来ていた子どもが一年生になり、友だちを連れてきて文庫の棚から次々と本を見せ「これ面白いよ、借りなよ」と薦めていて、その子の人間としての成長が感じられた。この子はこんなに本を楽しんでくれていると、見ていてほほえましく感じた。

・本というのは子どもにとって、楽しむものでしかない。本によって楽しい思いをして、別の世界を知ったり知識が増えたり、本が一生の友だちになってくれたらすごくうれしい。

・本の価値以外に、本と子どもの生活の広がりのようなものがあると思っている。例えば、文庫の受付の方が孫へのプレゼント用の本を悩んでいるときに、文庫に来ている小学生が本を薦めたり、多世代交流が生まれている。また、文庫利用者の母親の児童作家の方を呼んで読書会を行ったが、子どもから「また作家を囲む会を開いてほしい、私が仕切るから」と言われた。子どもが本を読む楽しみ以外にも広がる世界があると思った。

【質疑応答】

委員　：文庫活動をやっていく中で、行政への要望はあるか。

委員　：行政からは本を貸与という形で支援していただき、何よりありがたい。支援していただいていることが文庫活動のアドバンテージとなる。行政が決めた本ではなく、各文庫が自分で選んだ本を貸与してもらえるのがよい。

委員　：小学校では文庫に期待していることはあるのか。また、小学校と文庫との連携はあるか。

委員　：教員は学校の中の子どもしか見えない。地域の中で育っているということを踏まえ、地域の中で子ども自身が大事にされている居場所があることが、とてもありがたいと思う。

委員　：文庫を始めた当初は教員とのつながりが深く、教員が文庫に来て見学や読み聞かせをしてくれたりして、交流がけっこうあった。

委員　：静岡市立中央図書館には「図書館友の会」があり、長年図書館活動を支えている。文庫を長年やってる方や、他施設をを運営しているボランティアの方などが参加しているが、図書館にかかわっていくのと同時に、司書の雇用形態を聞き取りしてサポートし、代弁もしている。地域の取組で、文庫が支えられるだけでなく、文庫も図書館を支えていく関係が、全国どこでも広がってほしいと思う。

委員　：図書館を使って文庫の紹介をしてもらっていたが、最近は滞っている。以前は図書館とつながりがあった。

委員　：文庫と図書館は密につながって、お互いに応援しあうような関係がほしい。

５．意見交換「タブレット端末の学校図書館での活用について」

委員　：今回は前回に引き続き、学校図書館でのタブレット端末の活用について取り上げたいと思う。前回の振り返りも含め、中学校での取組について再度お伺いしたい。

委員　：学校図書館の本の貸出については、タブレットで校内の学校図書館の蔵書すべての検索と予約ができ、好きな時に借りたいものが借りられる。図書館を使った授業では、タブレット端末で新聞を作ったりしている。調べ学習の時は、直接図書館資料を使うのと、資料と併用してウェブサイトを検索するなどタブレットを活用する場合がある。今年から新聞データベースを導入し、朝日新聞と読売新聞の過去記事が検索できる。ユニークな例としては、学校図書館でタブレットを使い、修学旅行の句会を行った。

委員　：全国の学校司書や司書教諭から、学校図書館が全然利用されなくなっているという話を聞くが、現状ではどうなのか。

委員　：自分の学校では、どの教科も年間２回学校図書館を活用した授業をするよう、年間指導計画に入れている。毎年のことなので、どの教科も学校図書館を活用することが定着している。また、各学年でメルクマールという探究学習を行っている。修学旅行の事前学習など、学校図書館を活用している。ずっと続けてきており、これから先も受け継がれていくと思う。

委員　：中学校のＨＰをみると、図書館だよりがとても充実しているが、図書館だよりを学校のＨＰに載せていくという連携を結んでいるのか。

委員　：そのとおりである。図書館だよりには展示や新刊図書のお知らせなどを載せている。朝読書は自分の本ではなく、図書館の課題図書から読むが、読み終わらないと返せないので返却強化期間がある。２冊読むと３冊目は自分の好きな本を読める。課題図書コーナーからも自由に持っていける。合わなければ自分で他の本に替えることができる。各学年 30 種類あり、小説、ドキュメンタリーなどだ。フィリピンから来た子は英語の課題図書を借りていった。

委員　：自分の小学校は活動実践校ではないため、普通の活動をしている。その中で現行の学習指導要領では主体的・対外的に深い学びということで、子どもたちの探究心を育てる教育をしている。図書館もその一つの役割を担っている。

タブレットの活用は、まだあまり進んでいない。学校図書館の蔵書の検索機能だが、使っている子もいれば、図書館に来て司書などと話をするのを楽しみにしながら本の所在を聞く子もいる。

授業としての取組は、百科事典の使い方を４年生に指導した。国語の教材で百科事典の使い方の学習があり、学校司書がタブレットに使い方のガイドを入れ、子どもたちが手元で見られるようにした。図書室でタブレットを見ながら百科事典を使い、タブレットの中に入っている司書が作ったクイズをもとに探していく授業である。

また、図書委員が読書週間に、集会活動の情報、本の紹介や読書のクイズ、これからの取組などタブレットで学級に情報発信した。

わいわい文庫（伊藤忠記念財団）が作ったデイジー図書を、無料で入手した。１枚のＣＤ－ＲＯＭに 20 冊入っているが、取り込むのに膨大な時間が必要でまだ手を付けていない。今の段階では、学校の中でデイジー図書の利用まで進んでいない。デイジー図書の百科事典も有料のため予算との関係で難しいところだ。

委員　：わいわい文庫のデイジー図書は著作権の関係で、必要がある人のみ視聴できる盤と、誰でも視聴可能な盤とに分かれている。先進事例として、鳥取大附属特別支援学校では、提供元の了解を取って一作品を一枚の DVD の形で取り込みなおしたり、タブレットで見られるようにしたりして、子どもたちに提供している。そのようにすることは許可を取れば可能だ。誰でも視聴可のものならば、必要としない子が使ってデイジー図書を知ることもできる。

事務局：杉並区の学校図書館での活用内容は、杉並区ＨＰにも記事が掲載されている。

桃井第三小学校２年「学校図書館でのお気に入りの本紹介」では、児童がそれぞれのお気に入りの本を紹介した。本またはタブレットだけで紹介してもよいし、タブレットを使って本と一緒に紹介してもよい。紙の本とデジタルと差がなく使われている感じだ。

桃井第三小学校５年「総合的な学習の時間　やさしい町づくりについて考えよう」では、百科事典の電子書籍版「Sagasokka！」を導入し、探究的な学習を行った。検索窓に入力するキーワードから、関連する言葉が表示され、自分の概念や調べるテーマを広げるという活動に使っている。

泉南中学校３年国語「人工知能と私たちの未来」は、デジタルではないが、学校図書館で行った授業である。区立図書館や他校から集めた関連書や雑誌65冊を使い、調べ学習をした。今年度の活用実践校では他にも「Sagasokka！」を桃二小、小学生新聞のデータベースを杉二小が活用している。

委員：　タブレット端末の活用について、各委員のご意見、ご感想をうかがいたい。

委員：　タブレット活用について、中学生など他の学校の取組を知れてよかった。今日の会では、先ほどお聞きした文庫の話が一番身近に感じる。学童に行っている友達もいて、外で自由に遊びにくく、集まるのは固定したメンバーになってしまう。連絡網もないので親同士が知り合いでないと一緒に遊ぶこともできない。公園で待ち合わせて変更があっても連絡が取れない。学校でもなく学童でもない場所が地域に開かれていると、大人にとっても子どもにとってもありがたいと思う。

委員：　自分の子どもは中学生で、タブレットで学校図書館の本を検索しているようだが、使えているのかわからない。区内にある図書館の本は検索できないようだ。子どもが慣れていないのか検索がブロックされているのかわからないが、各学校によって内容が違うのではないかと、今日のお話を聞いて思った。

子どもの居場所だが、松ノ木小学校では敷地の一部を借り、放課後居場所という活動をしている。学童に入っていない子どもや他の小学校の子どもも来ており、児童館のような役割を果たしている。低学年の居場所がいっぱいあるのはよい。ただ、放課後居場所にも学童にもいられない子どももいる。放課後居場所のような環境ではない場所の一つとして文庫があるのは、選択肢として良いと思う。

委員：　家庭文庫はもっと区内にほしいと思う。全国的な学校図書館の状況についてお聞きしたい。

委員：　公共図書館の課題として電子書籍の導入がある。電子書籍については全国調査をしていて、学校図書館でも使えるようになってきているが、システムでは電子書籍が使えるのに学校で禁止されている事例もある。杉並区はタブレット活用が進んでおり、電子とアナログの差はなく使っているので大丈夫だと感じた。９歳までは電子書籍よりも紙の本が、身体的にインプットするので格段にいいと言われているのは確かだ。ただ、１年生からタブレットを使う時代なので、どちらでも使えるようにしてあげたい。電子書籍には文字を大きくしたり、読み上げをしたり、それぞれの困りごとに配慮できる機能がある。電子書籍ならではの、一人一人に対応できる、排除ではない方向を杉並区は作っていってほしい。年明けに続々と各自治体で承認される方向だ。

杉並区はデータベースの導入が進んでいて、それはさすがだと思った。

事務局：小学生には電子書籍で文学を読んでほしくないと思う。探究学習の入口として調べるときにデジタルデータを使うのは有効だが、文学を深く読むには研究者の間でも様々な意見が出ており、デジタルではきちんと読むことができないという研究結果も出ている。今すぐ電子書籍を導入しなくてもよいのではないかと思う。文科省の第５次子ども読書計画の有識者会議で電子書籍について検討しているので、よく議論していただき、パブリックコメントがあれば出してもらいたい。

委員：　新聞記事「読解力　デジタルより紙」（東京新聞）で、小学生への調査でデジタルよりも紙の本を読んでいる子どものほうが読解力があるという結果が出ている。紙とデジタルのどちらを選ぶかのアンケートでは、６割以上の児童が紙の本を選択、学年が上がるほど増加し、平均点以上の児童で顕著に高いという結果が出た。

文庫に来ている子どもで、タブレットはきらいと言っている子もいる。修学旅行や、学芸会

のような発表の場などでは、タブレット活用がよいと思う。

事務局： 杉並区立図書館のデジタル資料の扱いについてだが、電子書籍の購入価格は高価であり、また、購入できる冊数や２年間過ぎると貸出できなくなるなど制約がある。電子書籍のタイトル数はまだ少ない。すべての本を電子書籍化できるわけではなく、作家によっては電子書籍での出版を認めていない場合もある。電子書籍の必要性は認めているが、杉並区では今のところ具体的な導入の予定はない。

委員： 調べ学習でのタブレット活用は、実践が進んでいる印象を受けた。読書推進とのかかわりでは各委員の意見が食い違うが、電子書籍で子どもがどう本を読むかという経験がまだ蓄積されていない。著者の立場から、電子書籍で著者の気持ちが伝わるかお聞きしたい。

委員： 気持ちは読み手によるものもあるが、電子書籍だと印税は入らない。自分も最初は許可しなかった。しかしなぜ許可を出したのかというと、インクルーシブ教育のことを考えたからだ。小学校で電子書籍やタブレットをを取り入れるのはそこだと思う。インクルーシブ教育を行う上で、一人一人への対応はまったく手が足りない。その中で、タブレットがあると助かるという子どももいる。先ほどお話をうかがった中学校の取組が素晴らしく、それはやはり先生方がいるからできると思う。図書館でバリアフリーコンテンツを入れているといっても、それをきちんと把握して対応できるようにするのは、やっぱり人だと思う。

中学生が一週間の時間のスケジュール管理ができたら、本当の意味でのリテラシーだと思う。朝日新聞に、発達障害を大学で支援してもらえず、留年を繰り返していた大学生の記事が載っていた。タブレットで単位を一括して管理・運営するのを、何らかの形でスキルとして持っていれば助かるケースもあると思う。ユーザーのアイディアでどういう風に使うかで、生かされることはたくさんある。図書館で最初はデータベースを作って、自分自身の管理に少しずつ移行してどう発展させるか、できる人や教えてくれる人がいると、より有効なリテラシーとしての活用が高まると思う。

委員： 次回の懇談テーマについて、「区内高校との連携」という提案が事務局から出ている。区内在住の高校生へのサービスも含まれる。課題や話し合う内容を、事務局から説明する。

事務局：過去の子ども読書推進計画でもこの項目は掲げてきたが、なかなかうまく高校と連携できないでいる。保育園・小中学校は区立があるため連携がとりやすいが、高校は都立と私立しかないので情報が分断され難しい。一方で区内の大学との連携はある。現在は、都立高校４校と区内の専門学校への団体貸出、都立西高校の生徒による図書館ボランティア、区内在住の高校生による職場体験等は行っているが、全体的に高校生の読書活動を押し上げるような連携は進んでいない。杉並区全体でこの世代の読書を推進し、高校生の貸出冊数を伸ばしたい。また、高校生に対するデータベースの使い方や本の探し方などの啓発が課題になっており、どういった形だと高校生の心をつかめるか知りたい。都立高校の学校司書とどうつながっていくことができるのか、向こうにはどんな課題があり、私たちと共有できるものがあるのかこれから考えたい。

委員： 次回はこのテーマについて話し合う。そこで、次回に向けて宿題を出したいと思う。「区内高校との連携」について、今までにないようなアイディアを一つ以上考えてきてほしい。現在杉並区にある施策にフィットしたものがあれば、それでもよい。皆さん高校の教育に詳しいわけではないと思うので、生活の実感のなかでのアイディアで差し支えないと思う。

中学校の立場からは高校生についてどう見ているか。高校にこうあってほしい、というヒントはあるか。

委員：　高校生はよく本を読むと思うが、それは課題のため必要に迫られてであり、読書を楽しんだり自分の時間を使いにくくなっているのを感じる。本当の読書は楽しむため、自分が何かを得るためのものだと思う。それができない状況の中、どうやって風穴を開けて、高校生に本を読んでもらうかを考えていかないといけない。

６．その他自由討議

〇鳥取県立図書館学校図書館支援センター「学校図書館の機能を活用することで身に付けたい情報活用能力」

〇学校図書館活用データベース　狛江市立緑野小学校、札幌市立発寒小学校

〇東京純心女子中学校　遊佐幸枝氏「ベートーヴェン・レポート」資料

〇今川図書館　10 月 23 日　トロールの森ワークショップ　本棚制作を見学

〇中学校の書評座談会に参加。区民に知られていない。一般区民ともっとやれたらいい。

７．事務連絡（次回開催予定）

事務局：次回の懇談会は来年１月に開催したい。後日、日程調整のご相談をさせていただく。